

# 戦略で探る 近江の城

## 上平寺城

## 鉄壁の城とは

滋賀県立大学教授 中井 均

上平寺城は湖北の守護京極氏の居城で、国史跡に指定されています。山麓には居館跡があり、全国的にも注目される戦国時代の武家庭園も残されています。

ところが、この上平寺城は守護の城だけであつたのではなく、一度廃城になった後、戦国時代後半にまったく別の城として生まれ変わります。元亀元(1570)年、浅井長政は義兄である織田信長を見限り、越前の朝倉義景に与します。これに対して信長は美濃より近江に侵攻を開始することとなりますが、それを阻止するために築かれたのが菟安城と長比城です。『信長公記』には、浅井長政が越前衆を呼んで築いたと記されています。この菟安城こそが廃城となつていた上平寺城を改修して築かれたものでした。上平寺城は北国脇往還を見下ろす尾根先端に位置しており、一方の長比城は中山道を見下ろす尾根先端に築かれています。つまり、信長軍が美濃から大軍を率いて近江に侵攻してくるであろう二大街道を望む場所に迎撃用の城を構えたわけです。

上平寺城の構造は巨大な土塁を用い、虎口には枡形を導入し、さらに尾根先端には敵の登攀を阻止するために連続堅堀群が放射状に設けられています。こうした発達した城郭構造より、現存する上平寺城は戦国時代後半に築かれたものであることがわかります。京極高澄によって築かれた上平寺城は大永3(1523)年に廃城となっており、高澄段階でこのような発達した構造の城を築くことはあり得ず、その後に改修されたことを如実に物語っています。つまり残された城郭構造より上平寺城が廃城後50年ほどを経て改修されたことは明らかで、それが『信長公記』に記された菟安城であることは間違いありません。

さて、この江濃国境に境目の城として構えられた菟安城と長



比城には、坂田郡の鎌刃城主である堀秀村の軍勢が入れ置かれます。堀氏は元来京極氏の被官でしたが、浅井亮政が戦国大名として湖北への支配体制を強めるとその傘下に属することとなります。ところが羽柴秀吉と竹中半兵衛の調略により織田方に内通します。

元亀元年6月、信長はついに近江へ侵攻を開始します。菟安城と長比城は長政が築いた鉄壁の城でした。しかし、信長の侵攻を目前になんと守備隊の大將である堀秀村が信長に内通したことを知った城兵たちは戦うことなく逃亡します。『信長公記』には、「取るものも取りあえず退散」と記されています。背後で指揮を執っていた大將が敵方となったのですから、さぞ驚いたことだったでしょう。この結果、信長は戦うことなく近江に侵攻することができたのです。その直後には姉川の合戦がおこなわれ、信長は湖北への足掛かりを築きます。そして元亀4(1573)年には越前の朝倉氏を滅ぼし、長政の立て籠もった小谷城を落とします。

菟安城と長比城は信長の侵攻を阻止するために長政と越前衆が築いた鉄壁の城だったはずなのですが、信長は無血でそれを突破します。鉄壁の城を鉄壁たらしめるのは城の構造もさることながら、やはり守備する人だったのです。

中井 均(なかい・ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。